

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

- 後書きに代えて (2) 山岡洋一
 - ー 『国富論』の魅力
『国富論』を訳したのは、それなりの思いがあったからであり、この本を是非とも読んでほしいと思ったからだ。そこで、どこをどう読んで欲しいのか、感想めいたことを書いていこうと思う。

- インターネットと翻訳 武舎広幸
 - ー *DictJuggler.net*の公開
「文章に携わる人のための辞書・検索サイト」の*DictJuggler.net*が誕生した。その経緯と特徴を紹介する。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

『国富論』の魅力

翻訳の理想のひとつは、原著に何も加えず、原著から何も除かず、原文にまったく忠実でありながら、原著者が伝えようとした点を過不足なく読者に伝えられるようにすることだと思う。この場合、訳注や解説はないのが理想だということになる。訳注や解説に頼らず、本文だけで勝負する。これは容易ではないことが多いので、訳文の完成度を高めなければならなくなる。

このような翻訳の理想像を考えるのはたぶん、翻訳家という以外に何の肩書もないからだろう。日本では明治半ばからほぼ 100 年にわたって、各分野の専門家が翻訳を行ってきた。翻訳は各自の専門分野で研究した成果を発表し、後進に伝えるために不可欠な手段であった。だから、翻訳書は本文、訳注、解説の 3 点がセットになったものだという見方があったのだと思う。訳注と解説は訳者の研究の成果を披露するためにあるといってもいい。いまでは翻訳は各分野の専門家の本務ではなくなっている。だからこそ、肩書の欄に翻訳家としか書けないものにも場が与えられるようになったのだが、だからこそ、翻訳とは訳注や解説に頼らず、本文だけで勝負するという考え方があっていいように思う。翻訳家は蘊蓄を披露する必要はない。黒子に徹して、原著を活かすことに専念できる。

まして、今回訳したのは『国富論』だ。英語ではひとつの本についていくつもの解説や批判などが書かれるようになると、その本を巡って、ひとつの cottage industry (家内産業) ができたと表現されることがある。『国富論』の場合はこの決まり文句が使いにくいほど大量の解説書や研究書が書かれてきた。だから、経済学者でも経済学史研究者でもなく、経済評論家ですらない人間が解説を書く必要などまったくない。とはいっても、『国富論』を訳したのは、それなりの思いがあったからであり、この本を是非とも読んでほしいと思ったからだ。そこで、どこをどう読んで欲しいのか、感想めいたことを書いていこうと思う。

不朽の名著としての『国富論』

大内兵衛は戦争中に出版された『国富論』(岩波文庫)に 50 ページ近い「解題」を書き、その最後

にこう述べている。

……やがては死ぬべき定めであろうが、なかなか死なぬのが彼スミスである。(アダム・スミス著 大内兵衛訳『国富論』第 5 巻 146 ページ)

名文家の大内兵衛らしい記憶に残る言葉であり、戦後に繰り返し引用されてきた。この有名な言葉をいま読みなおしてみると、時代の流れを感じる。大内兵衛がこの解題を書いたのは昭和 18 年(1943 年)8 月であり、『国富論』が書かれてから現在までの 230 年で、この名著の評価がもっとも低かった時期にあたっている。世間の見方では、アダム・スミスはもう時代後れだということになっていたはずだ。だからこそ、「やがては死ぬべき定めであろう」とお思いだろうが、どっこい、「なかなか死なぬ」と論じたのだろう。

なぜ時代後れだとされていたのかは、『国富論』の考え方を示すとされている言葉をみていけばすぐに理解できる。自由放任 (laissez-faire)、自由市場 (free market)、見えざる手 (invisible hand)、夜警国家 (state as night-watcher) などの言葉である。じつところ、1000 ページほどもある『国富論』の考え方をこれらの簡単な言葉で示すのは不思議な話である。これらの言葉のうち、『国富論』で実際に使われているのは、invisible hand が 1 回(第 4 編第 2 章)、free market が 1 回(第 4 編第 8 章)だけであり、laissez-faire と night-watcher という言葉はまったく使われていないのだから、ますます不思議である。それはともかく、これらの言葉で代表される考え方は、20 世紀半ばには世界のどの地域でも流行らなくなっていた。

20 世紀半ばに流行していたのは、自由市場、自由放任ではなく、経済の計画と管理という考え方であった。市場ではなく、国家が主役だとされていたのである。この考え方は 1970 年代以降、行き詰まるようになり、1990 年代に入ると、国家から市場に主役が交代したとみられるようになった。「市場原理」が合言葉になり、アダム・スミスを引き合いにだすのが流行になった。スミスについて、「やがては死ぬべき定めであろう」と考える人はいなくなっ

たといってもいい。『国富論』は時代を超えた不朽の名著であり、永遠に命をもちつづけると考えられるようになった。いま、「なかなか死なぬ」といわなければならないのはスミスではない。マルクスであり、ケインズであるのではないだろうか。

だが、アダム・スミスをもてはやすようになった人たちははたして『国富論』を読んでいるのだろうか。「自由放任」という言葉だけで理解できるような書物ではないことを知っているのだろうか。はなはだ疑問のように思えたことが、前回にも触れたように、『国富論』を訳したいと考えた理由のひとつであった。

「世の中学」としての『国富論』

『国富論』は経済学の源流だとされている。19世紀から20世紀にかけて、経済学が社会科学の一分野として確立していくとき、さまざまな学説が登場するが、そのいずれも、『国富論』を批判的に継承している。だから、『国富論』はすべての経済学説の源なのだ。だが、それだけではないように思える。

アダム・スミスは経済学者ではない。肩書を嫌ったそうだが、普通は「元グラスゴー大学道徳哲学教授」とされている。「道徳哲学」というのは聞きなれない言葉だが、moral philosophyを直訳したもので、「社会哲学」が正しい訳語だと思う。つまり、アダム・スミスは哲学者であり、そのなかでも、社会を対象とする哲学を専門にしていたといえるだろう。

だがこれでも、アダム・スミスの全体像は分からない。社会哲学とは何かは、『国富論』第5編第1章第3節第2項「青少年教育のための機関の経費」に説明されている。スミスによれば、哲学は3つに分かれる。自然哲学、社会哲学、論理学である。そして、論理学という土台の上に、自然哲学と社会哲学の2つがあるという構造になっている。また、『国富論』には明記されていないが、社会哲学も同じように3つに分かれていて、社会感情論（普通、「道徳感情論」と訳されているもの）という基礎の上に、いまの言葉でいえば、経済哲学と法哲学があるという構造になっている。

いまでは「哲学」とは、文学部のなかのひとつの学科で学ぶものということになっているので、このスミスの体系も、人文科学のなかの一分野をさらに細かく分けたものだと誤解されるかもしれない。だが、18世紀にはphilosophyとは、いまの言葉でい

ば「科学」「学問」に近い意味をもっていたことを忘れてはならない。アダム・スミスがいう自然哲学、社会哲学、論理学は、学ぶべきこと、研究すべきことの全体なのであって、一部門ではない。この3つの分野で森羅万象のすべてを扱うのである。

そして、スミスは社会哲学だけに興味をもっていたわけではない。グラスゴー大学の教授に就任したときには論理学を担当していた。また、若いころに書いた「天文学史」というすばらしい論文があり、自然哲学の一部になるはずであった。だから、スミスが哲学の全体系、つまり当時の学問の全体系に関心をもっていたことは間違いない。

社会哲学では、『道徳感情論』と呼ばれている著作があり（『社会感情論』と呼ぶべきだと思うが）、社会哲学の基礎を論じている。また、グラスゴー大学の講義を学生が筆記したノートが見つかっており、『法学講義』などの題名で翻訳されている。ここでは社会哲学の残り2つの部分、仮に経済哲学と法哲学と呼んだ部分の全体が論じられている。この2つの部分がどう分かれているかという点、法哲学が統治と正義の理論であるのに対して、経済哲学は利害と便宜の理論であり、世の中の仕組みの全体を扱う。

だから、『国富論』は経済理論だけを扱った本ではない。全体は5編からなり、第1編は生産と分配を扱うミクロ経済編だといえる。第2編は資本とその蓄積を扱っており、マクロ経済編だともいえる。第3編はいわば経済史である。第4編は重商主義と重農主義の批判であり、経済学史であると同時に、経済政策論でもあり、時評という性格、具体的な政策提言という性格もある。第5編はいわば財政論だが、狭義の財政だけでなく、軍事、教育、宗教などについても論じている。

それだけではない。第1編から第5編までの随所で、原始の時代から近代まで、あらゆる時代の歴史も扱っている。イギリスをはじめとするヨーロッパだけでなく、アジアやアフリカ、中南米、北米など世界のあらゆる地域について論じている。当時はまだ鎖国の時代だった日本についても言及している。

要するに『国富論』は、その後の時代に経済学と呼ばれるようになった学問で扱う分野を中心にしながら、利害と便宜という切り口で、世の中の全体像を描こうとした本なのである。

アダム・スミスの時代から約 70 年後の 19 世紀半ばに『経済学原理』を書いたジョン・スチュアート・ミルが、『ミル自伝』の第 7 章でこう指摘している。「経済学は社会哲学 (social philosophy) の一分野であり、したがって他の分野と相互に結びついている。……経済学しか知らない人は、経済学すら分かっていないのである」。専門化した一分野としての経済学に視野を限るのではなく、世の中の全体をみていこうとする姿勢は、その後もしくは、優れた経済学者に受け継がれていったようだ。21 世紀の現在にはほとんどみられなくなったこの姿勢が『国富論』の大きな魅力になっている。

14 歳からの社会哲学としての『国富論』

『国富論』の原文を読んでいると、じつに平易に書かれていることに驚く。そして、論文調ではなく、講義を筆記したものだという印象を受ける。原文の文章から浮かんでくるスミス像は、書齋にこもって執筆をしている姿ではなく、教壇を歩きながら丁寧に講義をしている姿なのだ。だから翻訳の途中で何度も、ですます調に変えようかと考えた。結局は断念したが、ですます調の方が原文の雰囲気伝えるのに適しているかもしれないという思いはいまでも残っている。

アダム・スミスは 1751 年、28 歳のときにグラスゴー大学の論理学教授になり、翌年に社会哲学教授に転じた。その後、1763 年、40 歳のときまで講義を続けている。前述の『法学講義』を読んでも、この講義の際にはスミスの著書の基本的なスタイルができあがっていたことが分かる。

スミスの原文がなぜ平易なのかは、当時の学生について考えていけば理解しやすいかもしれない。アダム・スミスが社会哲学を学んだのは、グラスゴー大学でフランシス・ハチソンの授業を受けてからである。スミスは当時としては大学に入ったのが遅かったというが、1737 年、14 歳のときに入学し、1740 年、17 歳のときに卒業している。だから、ハチソンに学んだのは 14~17 歳のときだ。ちなみにスミスの親友、デービッド・ヒュームは 12 歳でエディンバラ大学に入学しているので、スミスの大学入学が遅かったというのは確かだろう。当時の大学生はいままでいう中学高校生の年齢だったのである。もちろん、当時の 14 歳といまの 14 歳が同じだとは思わない。当時は少なくとも学習という点で、いまより早熟だったのだろう。また、講義を受けていたのは学生だけではなく、大学院生や卒業生もいたと

いう。それでも、14 歳前後の学生に講義していたのは確かだ。だから『国富論』はいつてみれば、「14 歳からの社会哲学」なのだ。

読み物としての『国富論』

14 歳からの社会哲学という性格上、『国富論』は読み物としての魅力に満ちている。訳者の立場でとくに魅力を感じたのは、第 3 編「国による豊かさへの筋道の違い」だ。第 3 編は主にローマ帝国崩壊後の経済史を扱っており、全 5 編のなかでもっとも短い。読み物として読んだとき、ほんとうに面白い。とくに第 4 章の「農村の発展に対する都市の商業の寄与」は訳書で 15 ページにも満たない短い章だが、中世の領主の支配が緩んで農村の住民が解放されていく過程を利害という観点から説明しており、わくわくするほど面白い。

もうひとつ、第 5 編「主権者または国の収入」、とくに第 1 章「主権者または国の経費」も読み物として面白い。何が面白いかというと、この編の主題だといえる財政論から脱線した部分だ。たとえば前述の第 1 章第 3 節第 2 項「青少年教育のための機関の経費」には、経費のことだけでなく、教育の内容や教育機関の仕組みについての記述がある。「オックスフォード大学では教授の大部分は長年にわたって、教える振りをするにすらまったく止めている」という有名な言葉もここにある。同じく第 5 編第 1 章第 3 節の第 3 項「生涯教育のための機関の経費」は、宗教を利害と便宜という観点から分析したものであり、じつに面白い。この第 2 項と第 3 項から『国富論』を読みはじめる人がいても不思議ではないほどである。

時評としての『国富論』

翻訳をしていて、『国富論』の全体でとくに力が入っていると思えた箇所、これが講義だとするならば、アダム・スミスがとくに力説したと感じられた箇所は、第 4 編第 7 章「植民地」である。『国富論』初版が出版されたのは 1776 年だから、アメリカ独立戦争（イギリス側からみれば、アメリカ植民地の反乱）が起こった翌年、アメリカ独立宣言がだされた年にあたる。まさに戦争が起こっているときに出版されたわけで、当時のイギリスにとってこれが最大の問題であったのは確かだろう。だから、植民地政策を論じるときに、アダム・スミスの声が大きくなるのは当然といえば当然だと思える。

それだけではない。スミスはアメリカ植民地の反

乱を鎮圧しようとしたイギリス政府の政策に反対し、アメリカ植民地と合併するか、そうでなければ植民地を放棄するよう主張している。戦争の最中に戦争目的に反対する主張を行っているのである。

この点は、『国富論』の性格をじつによく示していると思う。理論の書であるだけでなく、政策上の具体的な問題、それももっとも切実な問題を扱い、思い切った政策を提言しているのである。理論を提示するとともに、その理論に基づいて具体的な政策を示している点はもっと注目されていいと思う。以前には『国富論』を読むとき、いわば理論編である第1編と第2編だけに注目する人が多かった。第4編、第5編の現実的で具体的な政策論にもっと注目してもいいと思う。

現実的な理論としての『国富論』

以上のように、『国富論』は世の中の現実を出発点に理論を構築し、現実を分析し、現実的で具体的な政策を提案するという形をとっている。理論のための理論を構築することはないし、単純な言葉だけですべてを割り切ろうとするようなこともない。いってみれば、「自由放任」「自由市場」などの言葉を金科玉条とする人とは正反対の姿勢をとっているのがアダム・スミスなのだ。

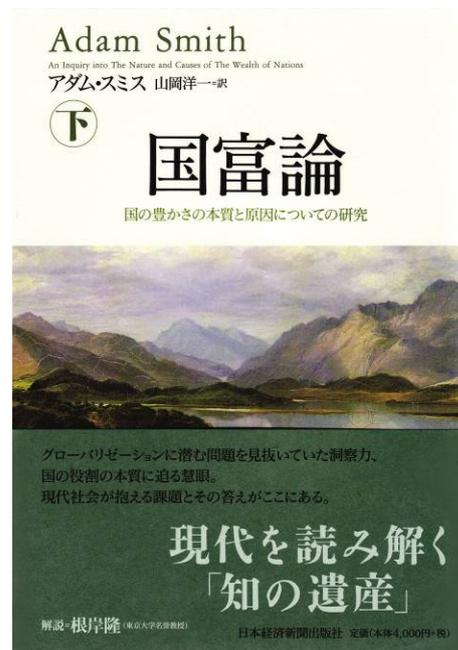
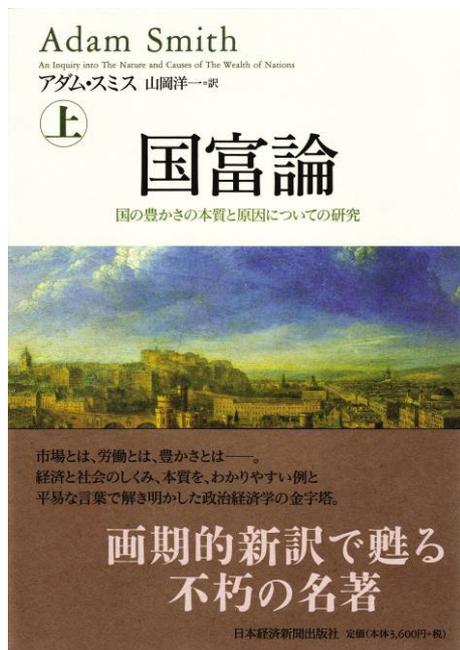
現実を出発点に、現実を広く深く観察して理論を構築していく方法をとるのは、近代の科学では当然のことなのだが、哲学や社会科学の分野ではこのよ

うな方法が「経験論」と呼ばれることがある。ロック、ヒュームなどのイギリスの哲学の伝統に根づいているので、「イギリス経験論」などと呼ばれることもある。この言葉は empiricism を直訳したものだが、おそらく、この語の類語である experience と日本語の「経験」の意味のズレを意識していないために起こった誤訳なのだろう。英語の experience は「経験」よりはるかに幅広い意味をもっている。

『国富論』が出版された直後に、アダム・スミスには商工業の経験がないのだから、商売のことが分かるはずがないといった人がいたそう。経験がないから empirical study ができるという簡単な事実をその人は理解できなかったようだ。

それはともかく、あくまでも現実に密着する『国富論』の方法は、いまの世の中を考える際に欠くことができないものである。230年前に書かれた本だから、もちろん、古いと感じられる部分もある。だが、それ以上に強い印象を受けるのは、現実感覚の鋭さではないだろうか。いまの世の中を知る上で、必読の本だと思う。

以下に今回出版された『国富論』の表紙画像を示した。表紙だけでなく、本文のレイアウトまで、じつに美しい本に仕上がっている。出版とは文化活動であり、文化的な価値によって経済的価値を追求するものであることを示した担当編集者とデザイナーに深く感謝したい。



DictJuggler.net の公開

この『翻訳通信』の配信者である山岡さんに最初にお目にかかったのは、かれこれ二十年前のこと。私の留学に付き合っただけで米国に滞在していた家内が帰国後勤めた翻訳会社で、山岡さんは家内の上司だった。詳しいことは忘れてしまったが、当時まだ大学院で自然言語処理の研究をしていた私に興味をもってくださって、一度会社を訪問させていただき、機械翻訳（翻訳ソフト）について議論させていただいたことがあった。

当時のことで、家内がよく話題にするのが、私の実家から送られてきた干し柿（私の田舎では「柿干し」と言うのだけれど）を家内が持っていったこと。山岡さんは「おいしい、おいしい」と言って、五つも六つもほおぼっていらしたそうだ。当時の干し柿の作者は私の祖母と母親だったが、今は義姉がその役目を受け継いでいる。

家内はその後、二、三ヶ月でその翻訳会社を辞め、在宅翻訳者となってしまったので、山岡さんとはそれっきりになってしまった（その後もお目にかかってはいないので、実際にお顔を拝見したのは、あのとき一度きりだということに、この原稿を書いていて気がついた）。

我々夫婦は、私の大学院満期退学を機に会社を設立。私は他社の機械翻訳ソフトの開発を請け負いつつ、家内と一緒にコンピュータ関連のマニュアルなどから始めて、書籍の翻訳にも手を伸ばし、翻訳とソフトウェア開発という二足のわらじを履いて、バブル崩壊後の不景気の日本を生き延びてきた。

二十年近くの空白を経て山岡さんとの（仮想世界での）再会を取り持ってくれたのはこの『翻訳通信』だった。どこだったかは忘れたが、翻訳関係のサイトに山岡さんのお名前があり、『翻訳通信』や、名翻訳書の訳例を集めた『生きた訳語・活用・用例の辞典』が紹介されていた。『翻訳通信』のバックナンバーを拝見すると、非常に面白く、早速メルマガジンの配信を申し込んだ（過去のメールを検索して調べたところ、これは2004年4月25日のことだ）。我々が常日頃感じていること、考えていることが代弁されているように感じ、折に触れて自分の

サイトやメルマガなどで紹介させていただいたりした（ときには「ちょっと違うんじゃないでしょうか」と思うことも、もちろんありはしたが）。

私が山岡さんに最初のメールを出したのは2005年1月10日。某社と共同で開設した翻訳のオンライン講座の広告を『翻訳通信』に掲載していただけないかと、お願いしたときのことだ。山岡さんのメルマガは、格好の広告媒体だと思ったのだ。私のことを覚えていてくださり、お送りしたオンライン講座のテキストは「なかなか面白かった」との評はいただいたものの、お眼鏡にかなわず広告は掲載していただけなかった。

オンライン講座の開発が一段落してから、我々の会社で^{ディクトジャグラー}DictJuggler (=Dictionary+Juggler) というソフトを作ろうということになった。ソフトウェア開発会社にとって、自社独自のソフトウェアを作るのは、大きな夢。翻訳とソフト開発の二足のわらじを履く我々ならではのソフトを作ろうと、もう一人の翻訳者兼プログラマーと数ヶ月間開発に没頭し、発売した。ADSLなど常時接続の環境を前提として、翻訳作業に必要なインターネット上の辞書や検索サイトをバカバカ引いてしまうという発想のソフトウェアだ。PDFファイルやウェブページ、Wordファイルなどにある英単語を、特定のキー（あるいはマウスボタン）を押すだけで、たとえば、英辞郎と、Yahoo!の国語辞典と、Googleと、英英辞典と、そして山岡さんの『生きた訳語・活用・用例の辞典』とで一度に検索して、別々のウィンドウに表示する。検索はワンタッチ、翻訳者は必要な結果が表示されている辞書（検索エンジン）のウィンドウを見れば、欲しい情報が即座に手にはいるというわけだ。

「山岡さんの辞典サイトをこのソフトに登録させていただいてよろしいでしょうか？」とメールを出したのが、2005年8月2日。これに関しては快諾をいただいて、我々のソフトに山岡さんの辞典を登録させていただくことができた。

リリースする製品がひとつでは寂しい。そこで『翻訳通信』で津森優子氏が紹介していらした藤本直氏の類語辞典『類語玉手箱』を思い出した

(<http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/dic/tamate.html>)。紹介された時に藤本氏から購入して、すでに利用させていただいていたのだが、あらためて連絡をとり、マッキントッシュ版を弊社の製品としてダウンロード販売することをお許しいただいた。

DictJuggler と類語玉手箱は、今でも私の翻訳作業には欠かせないツールとなっている。我ながら便利なソフトができたわいと思っているのだが、残念ながらあまり売れていない。ひとつにはマッキントッシュ用しかないからだ。一般人は DictJuggler が必要なほど辞書や検索エンジンを使わない。だから翻訳者に買ってもらうしかないのだが、翻訳者の大部分は Windows を使っている。Windows 版を開発すればある程度売れるかもしれないが、翻訳の片手間にやるには手に余る（そもそも Windows は好きではないので、できるだけ使いたくないし…）。

もうひとつの理由はソフト自体が売れなくなってきているからだろう。ブラウザはタダで使え、Word や Excel はパソコンを買えば付いてくる。昔のように、パソコンを買ったらソフトも買うという習慣はなくなってしまったのだ。よほど特徴のあるソフトでない限り、それを販売して儲けるといのは不可能になりつつある。辞書はあちこちのサイトでタダで引けるし、翻訳ソフトもタダで使える。ワープロも表計算の機能もタダで使えるようになりつつあるのだ。

こんなことを考えているうちに、ある日気がついた。考えてみれば、テレビもラジオもほとんどがタダで放送されているではないか。その昔この仕組みを考え出した人はたいしたものだ。テレビやラジオをタダで放送しながら、テレビ・ラジオ局は巨万の富を築いている。この考えにいたって、ようやく Yahoo! や Google が無料でコンテンツを公開して、集客に励んでいる理由がはっきりと理解できたのだ。

インターネットも同じことなのだ。ケーブルテレビやスカパー！があるように、有料サイトも残りはするだろうが、おおかたは無料のサイトに客足をとられていくことになるのだろう。インターネットもソフトも無料の時代になったのだ。

そこで、まずは DictJuggler の機能縮小版ともいえる DictJuggler Mini を無料で公開した。一度に検索できるサイトはひとつだけだが、ワンタッチで色々な

辞書や検索エンジンを使えるという基本機能は同じだ。好都合なことに Mac OS X でも Windows でも「ウィジェット」とか「ガジェット」とか呼ばれる仕組みが考案され、従来のアプリケーション作成に比べると、はるかに短時間で開発ができる。このソフトの公開で、会社へのアクセスも徐々に増えたが、まだ儲けるというにはほど遠い。

続いて、類語玉手箱の無料公開を考えた。藤本直氏は当初気乗り薄で、あくまでも CD-ROM 版として販売にこだわっていたのだが、自分を納得させたのと同じ論法で藤本氏の説得に成功した。無料の類語辞典があちこちで公開されているのだから、いくら内容がよくても、お金を払ってまで使ってもらうのは難しいのだ。

藤本氏と公開について議論しているところへ、今度は山岡さんから電話がかかってきた。これまで『生きた訳語・活用・用例の辞典』を公開していた大学のサイトが使えなくなって、現在閉鎖中だという。「それならば、類語玉手箱と一緒に公開しませんか。プログラムの方は私が作りますから」と提案した。こうなることが決まっていたかのごとく、山岡さんから絶妙のタイミングで連絡がはいったのだ。類語玉手箱用に作っていたプログラム MAWSELS を少しだけ変更して、決まってからは数日で公開の準備は整った。

こうした経緯で、「文章に携わる人のための辞書・検索サイト」の DictJuggler.net (<http://www.dictjuggler.net/>) が誕生した。現在公開されている辞書は、上で紹介した類語辞典の『類語玉手箱』と、山岡さんの『生きた訳語・活用・用例の辞典』のデータをもとに形式を変更し、Amazon へのリンクをつけて書籍に関する情報も簡単に参照できるようにした『翻訳訳語辞典』のふたつ。それに、英和、英英、国語を初めとした語学関連辞書や、百科事典、検索エンジンなどを簡単に利用できる、私が作成した DictJuggler Mini のウェブページ版。すべてが無料で利用できる。画面に表示される広告を興味に合わせてクリックしていただくだけで、サーバ代や開発費がまかなわれる（ことになっている！）。

公開される二種類のデータは、いずれも第一線の翻訳家の方が長年にわたって収集された貴重なデータだ。『類語玉手箱』はピッタリはまる訳語が出てこなくて、イライラしたときに頼りになるはずだ。従来の類語辞典よりもはるかに幅広い範囲の関連語

が載っていて、しかもクリックだけで関連語の関連語、関連語の関連語の関連語、……とたどっていきける。提示された単語の意味に疑問があるなら、国語辞典へのリンクをクリックして意味や用法をすぐに確かめられる。

一方、『翻訳訳語辞典』は東西の翻訳者が知恵を絞ってひねり出した訳語の宝庫だ。思いつくままに単語を入力して、その訳語や用例を眺めるだけでも大変面白い。訳語に対してもリンクが張られているので、たとえば *lecture* を検索して、表示された「講義」という訳語をクリックすることにより、「講義」に対応する英単語として *class*, *course*, *litany*, *seminar* などが使われていることも簡単にわかる。現役の翻訳者はもちろん、学習者にも大変有用なはずだ。

☆ ☆ ☆

当初予定していた『類語玉手箱』に降ってわいたように『翻訳訳語辞典』も加わり、*DictJuggler.net* は思いのほか素晴らしいスタートを切ることができた。まだまだ機能面の課題も多いが、翻訳の合間に時間を見つけて着実に改善していこうと思っている。

そして、より重要なのが内容の充実だ。まだまだたくさんの「辞書」が翻訳関係者のパソコンに秘蔵されているのではないだろうか。そういったデータを公開していく場として、このサイトを利用していただけたらと思っている。

そしてそして、あと何年か後に、*DictJuggler.net* に集められた翻訳者の英知を生かして、翻訳者が一度使ったら離れられないような、便利な翻訳ソフトを作るのが私の大きな目標なのです。

DictJuggler.net

文章に携わる人のための辞書・検索サイト



翻訳家山岡洋一氏の『翻訳訳語辞典』と翻訳家藤本直氏の『類語玉手箱』
を無料公開中

辞書募集中

お持ちの辞書データを *DictJuggler.net* やご自身のサイトで公開しませんか？
翻訳家や文筆家、一般の方々に無料で使っていただきながら、収入を得ることが
できます。初期費用も無料。また、CDやDVDで販売することも可能です。CGI機能
の使えないサイトでも大丈夫。独自開発のエンジンにより、辞書引きソフトのイン
ストールなし、ウェブブラウザだけで検索が可能です。詳細はサイトの連絡ページ
からお問い合わせください。

広告募集中

DictJuggler.net ではサイトに掲載する広告を募集しております。文章に携わる人々が
集うサイトに効果的な広告を掲載してみませんか？ 2007年4月末日まで、サイト
オープンを記念して広告料50%オフキャンペーン中です！